

# 安らぐ心「ここにいたい」

## 「にっぽんルポ」

### 傷ついた人々

↑ 1面から続く

東京ドーム三分の女が山里に、厚生博覧会作業員が山々を立ち並ぶ「かにた婦人の村」。女性たちは朝七時二十分のチャイムで食堂に集い、礼拝から始まる。その後、それぞれの班に分かれて昼居の時間を過ごす。

赤、紫、黄、緑…。寮の部屋に無造作に毛糸が転がっている。毛糸は女性たちのしなやかな指先で縫われ、色とりどりの小物が生まれていく。腰掛けや掛帘、布巾、カバ。「編み物をしている夢中になつて時間を忘れてしまう」とこの職の女性。短髪前めくようになった口元は、女性らしい趣やかなほほ笑みがあった。

各地の婦人保護施設は差別、貧困や借金から苦痛を味わっていた人々が多かった。現在ではDV(家庭内暴力)や援助交際、アナルピアスへの強制出席など、性的被害は多岐にわたる。かにたは、福祉支援の過程でトラブルになり、「手に負えない人」となされて入所する女性もいる。

「もう、かにたしかない」。ある時、関西方面の自給体の婦人相談所から連絡が入った。生きることをあきらめていた四十代の女性。高校を中退し、生まれながら傷ついたりしながら、どこにも支援の網にからず生きてきた。そ



の女性もかにたで生活するうちに、「もうかにたにいたい」と思えるようになった。

多くの入所者は今もトラウマ(心的外傷)を癒えておらず、取材で過去の体験を詳しく聞くことはできない。

「彼女たちは、たまたまこのことに困っているだけなのに、社会にどこで困った人たちを押しやられてきた。五十年経って施設長は投げやりな」

五十年経って施設長は、一九八七年、妻と一緒にかにたに移

## 行き場のない女性を保護

り住んだ。一時は北海道で看護士をしたが、二〇〇六年に子どもを産んだ。家族も戻ってきた。「子育てすること、弱い人だとお話を言われ、押し回さることをやめた。同じ場所を下りていき、一緒に夜を過ごすなどしなさいか」と。

かにたの施設の急変を聞いて、女性たちが今日も駆けよる。SOSの電話はあきまらぬ。

### 温かい支援の輪

かにたを去る朝の甲斐は、ボウリングもたがせぬ。

半世紀以上通い続ける鈴木俊治さんをもその一人。一九六〇年代に知り上がった学生運動の熱い頃にいきなり、主婦の代わりに始めたのが、かにたのボウリングだ。

ソニーに入社し、研究者として多岐にわたる経験があるかにたは足元を踏んだ。作業小屋や階段などの施設設備をまじい、いつか入所者から「お兄さん」と親し

まれる存在だ。アロが通った施設と違いは、真実だが、日曜大工のような出来栄はほつりきさま。

昨年十月下旬、大船の掛掛声がかぶりに響いていた。ボウリングの人の施設職員らが一度に会った。女性たちが、村の田舎に暮らすことも来ずついで。

つぎ来た餅を煮てほめる。「今年はいつともおれいしね」。食料が枯渇する食卓には、お茶と編んだ掛帘が飾られ、女性たちが賑わって大衆の機織をミカなども並ぶ。

電算の外で、一人の女性が一本の木を植えていた。食卓の隅の壁に、親元から通函に開いたんだ。壁に「かわいそう」。知的障害で小学校修業年ほどの理解力しかない。女性は朝礼を本をいたわるように、静かに膝に手を置いた。

鈴木さんが手をあぐり、「おれいしね」。女性、子どものように笑顔で駆けだした。



入所者の女性たちと食事する施設長の五十年経ったかにた。五十年経って五十年経ったかにたの村で

### 残る戦争の遺物

かにた婦人の村は、旧軍庫の跡地に開設された。戦争の遺物は施設内に今も横たわる。

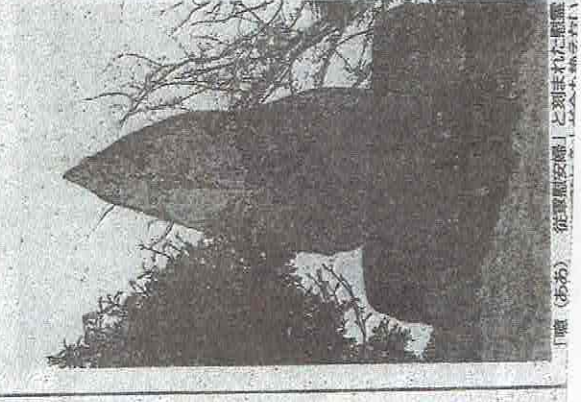
頂上の丘には、二つの碑がたつ。刻まれた文字は「戦後軍庫跡」。かにたに入所していたある女性の墓で建てられた。

戦前、女性は格闘家、工廠の長女に生まれたが、父が編織の借金を買代わりしたことで、遊郭に売られ、戦場の日本軍の慰安所に行き着いた。女性は南洋諸島のバヌア島の慰安所で働いた。島の日々を告白。「戦地に取った同僚女性たちが毎夜夢に浮かぶ。どうにか慰安所を作ってください。そう言えるまで戦後約四十年がかった」。

一九八五年夏の除幕式で、女性は南の海に向かって叫んだ。「みんなここに帰ってきておいでよ」。泣き崩れた身体を、そっと抱き寄せたのが前施設長の天野道子さん(68)だった。

女性の告白と初めて知った戦場の苦痛。本場にショックでした。私は何も知りませんでした。天野さんは旧満洲(中国東北)生まれ。父は銀行員で、母は由女(おんな)だった。戦時中は東京郊外の学校に通学し、長期休暇のたびに朝鮮半島列車で横断して満洲に帰省した。当時、日本の植民地だった朝鮮半島の女性たちは慰安所にとせられた歴史を後で知った。「あの列車のレール上を、私と同年代の女性たちが慰安婦として

乗っていたんだ。」「クリスマスだから天野さんは終戦後、家族をしくして街をまわらう。遺物の姿に心を痛め、二十三歳で戦争体験に身をまかせた。あれから七十年。性別におびえる女性はいちも少ない。傷ついた女性が訪れるたびに、両手をあげ、胸をかくして泣きながら、「もうお父さん、よく生きて、かにたにいらしててくださいましたね。」(父・木原喜子/写真・木口慎子、木原喜子)



「戦(おれい) 従軍慰安婦」と刻まれた慰安所跡

終り「トイト」を「女」は休ませました。「にっぽんルポ」は隔週第3土曜日に掲載し著